Title	日本の小学校における内容言語統合学習(CLIL)の試み : 聖学院大学総合研究所小学校英語指導法セミナー実践記録
Author(s)	藤原, 真知子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.5, 2012.3 : 6-8
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3874
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

聖学院大学総合研究所 小学校英語指導法セミナー実践記録：日本の小学校における内容言語統合学習（CLIL）の試み

藤原　真知子

はじめに

2011年度から新学習指導要領において、５・６年生の外国語（英語）の必修化がスタートした。これに先駆けて、聖学院大学総合研究所では、小学校教員・小学校英語指導者を対象とした英語指導法セミナーを2009年に開始した。年に２回行ってきたこのセミナーは2011年の秋で６回目を迎えた。英語が必修化されたのは、５・６年生であるが、多くの小学校で低学年から英語の授業が行われており、セミナーの内容は、１年生から６年生を対象とした。

「こうやって教えよう小学校英語：現場からの提案」と題したセミナーでは、「他教科の内容を英語の授業に取り入れる内容言語統合型学習」「日本文化の発信」「チャンツで楽しむストーリー」「英語ノートの活用法」などについて講義・実践を行ってきた。ここでは、その中でも参加者の関心が高かった「内容言語統合型学習」（Content and Language Integrated Learning, 以下CLIL）について紹介し、この指導法で学習している児童の様子とこのセミナーでCLILを体験した参加者のコメント、CLILのアプローチで学習した児童の保護者のアンケートやコメントから、日本の小学校におけるCLILについて考察する。

CLILと教材

CLILとは、「内容と言語の両方を学び、教えるために追加言語（注１）が使用される、焦点が二重化された教育方法」である。つまり、教授および学習プロセスにおいて、内容だけなく、言語にも焦点が置かれる。どちらか一方が強調されたとしても、お互いに折り重なっている（Coyle et al., 2010, p. 1）。

CLILは、内容（Content）、コミュニケーション（Communication）、認知（Cognition）、文化（Culture）という、４つの概念的な構成要素（４C）を備える。これらの要素は、相互に関係しながら、特定のコンテクストにおける内容学習と言語学習を統合する（Coyle et al., 2010, p.41）。

日本の小学校においてCLILの指導法で授業を行うには、それに適した教材が必要であるが、現時点では、教材を探すのは非常に困難である。筆者ら（藤原・バード・相羽）は、CLILの授業を進めるにあたって、独自の教材を作成している。まず、小学校教員と相談して適切な内容を選定し、教科書や教材をよく研究した上で、児童が内容をよく理解でき、指導者や周りの児童と活発なコミュニケーションをとることのできる教材を作成する。この点で、筆者らが行っている教材制作の理念は、CLILに合致する。

CLIL学習例：朝顔の栽培

（１）題材選びの背景

日本の小学校では、１年生の生活科の学習で朝顔の栽培をする。入学して間もない５月に各自が鉢をもらい、種を植える。定期的に水をやって世話をし、芽や葉が出た様子、つるが伸びる様子、つぼみが出て花が咲く様子を観察して絵日記をつける。夏休みには鉢を持ち帰り家で世話を続ける。秋には種をとる。冬になると収穫した種を学校へ持ってくる。春には新年度に入学してくる１年生に種をプレゼントする準備をする。このように朝顔の学習は約１年に及ぶ大きなプロジェクトである。筆者らは、このことに注目し、朝顔の栽培をCLILの授業に取り入れることを決めた。

（２）朝顔の栽培教材

先に述べた方法で、朝顔の栽培過程の教材を作成した。栽培過程を３段階に分け、英語のロンドンブリッジの歌に当てはめた。

Morning glory song （朝顔の歌）

１．Morning glories, asagao,
Pretty flowers, pretty flowers,
Make holes. Plant the seeds.
Water, sunshine, grow, grow, grow.

２．Look, look, coming up,
Coming up, coming up,
Leaves, vines, grow, grow, grow.
Leaves, vines, grow, grow, grow.

３．I see buds. I see flowers.
White and pink, purple and blue,
I see brown seeds. Pick, pick, pick.
Brown seeds, pick, pick, pick.
（Fujiwara, Aiba, & Byrd, 2010）.

（３）朝顔の栽培をCLILに取り入れる手順

まず、体を使って語彙を学ぶ。次に動作を交えて一つずつ成長過程が言えるようにする。栽培過程の歌を体で表現して歌う。ここでは、児童が言葉の意味を体で覚えられるようにAsher （1977）が提唱するTPR （Total Physical Response）を用いる。グループで発表したり、低学年の児童は家族に朝顔の歌を教えることを課題にする。成長段階に応じてコミュニケーションを楽しむ。同じ質問を繰り返すことで内容について迅速に答えられるようになってくる。１年生は、自分の朝顔についての質問に答えることを大変喜ぶ。他の学年の児童も、既に経験した内容なので、積極的にコミュニケーションがとれる。

会話例：（T:teacher　S:student）

T: Big holes or small holes?	Ss: Small holes.
T: One seed in one hole?	Ss: No, two!
T: What's this?	Ss: Vine.
T: How many seeds did you pick?	S 1 :49./ S 2 :100!
T: What color are the seeds?	Ss: Brown./ Ss: Black.

（４）４Ｃから見た実践

ここで、前述した４Ｃに即して、筆者らの実践を見直してみる。朝顔の栽培は、いうまでもなく、４Cのうちの内容（Content）にあたる。

ＣＬＩＬにおいて、コミュニケーション（Communication）は、学習の言語（language of learning）、学習のための言語（language for learning）、学習を通しての言語（language through learning）という３つの視点からとらえられる（Coyle et al., 2010, P.36）。実践の中の「朝顔の歌」の歌詞やTPRで学ぶ語彙のように、トピックに直接関連した言語材料が学習の言語であり、会話練習で使われる表現や技能が学習のための言語に相当する。そして、これらの言語材料や表現・技能が教室活動や家庭で繰り返し使用されるとき、学習を通しての言語として効果的に習得されるのである。

また、児童が朝顔の歌を家族に教えたことは、文化（Culture）にも関わっている。朝顔の栽培を、教室の中の文化や小学校の文化としてだけではなく、家庭の文化としてとらえ直すことにもなったからである（注２）。

最後に認知（Cognition）について触れたい。CLILでは、記憶・理解・応用からなる低次処理、分析・評価・創造からなる高次処理に分けられる。実践を認知的側面から見た場合、記憶、理解、さらに、手続きを実行できる応用を含む低次処理まで実現している。

CLIL指導法に関するアンケート及びコメントとその分析

（１）児童の保護者によるアンケート及びコメント

CLILアプローチで「朝顔の栽培」と「大豆の栽

培」を学んだ私立小学校の１・２年生の保護者を対象に行ったアンケートでは、回答した136人の保護者の98.５％がこの試みに賛同し、次のようにコメントをしている。

・日本語と英語で同じ内容を学ぶのはいい。
・こどもがこのような英語学習を楽しんでいる。
・こどもが英語で何かを伝える力を身につけた。
・もっとこの方法を授業に取り入れてほしい。

（Fujiwara, Aiba, & Byrd, 2010）

（２）セミナー参加者によるアンケート及びコメント

このセミナーで取り上げたCLILの内容は、社会科（地図記号と町のようす）、算数（計算）、生活科（朝顔の栽培）、家庭科（食事のマナ―）、理科（蝶の一生）、保健（風邪の予防）と様々な分野に及んだ。この６回にわたるセミナーで、アンケートに回答した155人のうち96％が講義・実践内容について良かったと答えている。（但し講義・実践には他の内容も含まれる）。以下はCLILアプローチについての参加者の代表的なコメントである。

・この教授法について全く知りませんでしたので、衝撃でした。
・知っていることを使って英語の学習をすると、こども達も自信を持ってできると思う。
・日本語で詳しく説明する必要がないのが良いと思う。
・具体的でわかりやすく、すぐに使える。
・英語も授業も楽しくなると思う。
・アクションを付けると言葉が入りやすくて良い。
・簡単な英語を使って教えられるのがよい。やってみたい。
・生活科や理科の内容と歌が結びついている点がよかった。目から鱗でした！
・これからもいろいろ紹介してほしい。

アンケート結果とこれからの展望

セミナーでCLILを体験した小学校英語指導者、児童の保護者のほぼ全員がこのCLILのアプローチに賛同し、さらなる要望を示している。筆者らが指導する公立・私立の小学生もCLILの学習に積極的に取り組んでいる。英語が必修化され、小学校教員から教材不足を嘆く声が多く聞かれるなか、児童も指導者も保護者も高く評価しているCLIL教授法は、これからの小学校英語指導の新たなアプローチとして期待されるのではないだろうか。そのためには、教材の開発と普及が急務であると考える。筆者らも小学校教員と協働して、新たな題材を選び、使いやすい教材作成を続け、研修会などで普及していきたいと思っている。

注１）追加言語とは、多くの場合学習者にとって外国語であるが、第二言語、継承語、コミュニティ言語などの形式をとる場合もある。

注２）筆者らは、外国文化を含むより広い異文化の学習を、日本文化の発信を通じて実践している。

引用文献

Asher,J.（1977）. Children learning another language: A developmental hypothesis. *Child Development*, 48,1040-1048.

Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. （2010）. *CLIL: Content and language integrated learning.* Cambridge: Cambridge University Press.

Fujiwara, M., Aiba, C., & Byrd, B.（2010）. Content-based elementary school English: Growing morning glories and soybeans. In A.M. Stoke（Ed.）, *JALT 2009 Conference Proceedings.* Tokyo: JALT.

（ふじわら・まちこ　聖学院大学総合研究所特任講師）